

みんなにやさしい、特別支援教育 (19)

N先生のにこやかな表情で、穏やかな話し方で始まった2年生の校内研究授業には、子ども達もゆったりと落ち着いて安心をした様子で取り組んでいました。

授業は、動物園の絵を使って、動物の様子を想像しながら文章に書く学習でした。ここで活躍したのが、電子黒板でした。絵を移動したり大きくしたり、手の動きに合わせて絵

が変わることに、子ども達は食い入るように見ていました。電子黒板は、子ども達の興味を引く便利な教具です。



N先生の話し方には、学ぶところがたくさんあります。声の大きさ、抑揚・スピードの変化により、強調するところをゆっくり話したり、強く話したり、繰り返し話したりしておられました。また、「なるほど」とうなずいたり、「これだって」と話をつないだり、子どもの様子を見ながら要点は繰り返したり、絶妙に間をとったりしていました。同じ内容の話でも、話し方一つで伝わり方はまったく違ってくるものです。それで救われる子どもは少なくありません。

個別の作業に入る前に、全員で動物の様子を想像する場面では「パンダが笹を食べている様子」や「猿が木につかまっている様子」の



動作化を行い、動物の気持ちを想像させておられました。書き表す前に動作化することで想像した様子や心情を言葉で表現しやすくなります。低学年の子どもたちにとっては、有効な手段です。

後半の活動では、書き表したことを友だちに聞いてもらって、そこからわかる動物の名前を当てると

いうクイズ形式をとられました。

クイズ形式は、子どもたちの興味をそそる活動で、ぐっと授業に集中できていました。

書き表す活動では、右の写真のような色分けして形を変えた付箋紙を用意されました。何気ない工夫ですが、こういった工夫が子どもたちの学習への意欲になっています。

子どもたちの発表を板書する場面では、吹き出しを活用されていました。これは、単なる箇条書きよりも、視覚的イメージが強くなり、子どもたちに印象づけやすくなります。また、吹き出しの形を変えることで、その内容の重要度をアピールすることもできます。例えばギザギザで吹き出しを描いた場合は、「重要」と子どもたちと約束しておくことも大切です。

個別の作業に入ると、机間指導を大切にされていました。机間指導は、子どものつまづきに気づき個別的に支援する貴重な機会です。

また、子どもたちの理解度を授業の途中で評価し、その後の授業にフィードバックできます。黒板や教師机にはりついている蒲鉾先生にならないで、配慮が必要な子どものそばに行き、教科書の行を指さしたり、肩に手を置いたりしながら机間指導をしていくことが大切です。また、「先生がそばに来る」という意識は、授業全体に緊張感を与えます。授業にメリハリをつける上でも、机間指導は欠かせないものです。

しかし、それ以上に大切にしたいことは、机間指導をしながら、どの子どもにも個別的な称賛をすることです。一斉指導が中心の授業であっても、机間指導を大切にしたいものです。先生に直接、丸をもらえる子どもたちの表情は一瞬ほころびます。子どもは、大好きな先生にほめられるのが本当にうれしいのです。

正面から、後ろから、頭をくっつけるようにする、しゃがんでのぞき込むようにする、両腕で抱きかかえるようにするなど、子どもによってかかわりを深める機会にしたいものです。

